

-2014年5月21日

2013年度採択 研究推進プログラム（科研費連動型）研究成果報告書

| | |
|------|-------------------------------|
| 採択者 | 所属機関・職名：情報理工学部 教授 氏名：仲谷 善雄 |
| 研究課題 | 被災者の思い出の共同想起支援システム |

I. 研究計画の概要

平成25年度科学研究費助成事業－科研費－申請時の研究計画について、概要を記入してください。

大規模災害によって写真や日記などの思い出の品を喪失した被災者の心のケアの一環として、①失われた思い出想起のきっかけ（トリガー）としての思い出の品の代わりに、地図や写真、他者の思い出などをトリガーとしてスマートフォンから提示し、仮想空間上で地域の思い出の共同想起を支援するとともに、それらの想起された内容から新たに計画する町に必要な都市機能を抽出するシステム、②仮設住宅などに分散して居住する被災者が実際に集会所などに集まったときに共同想起を支援するシステム、の2点について研究開発を行う。

分散型共同想起支援については、分散居住する住民が、町の思い出をネットワーク上で共同想起し共有する枠組みを構築する。宮古市の実験（立命館大学理工学部主催の「記憶の街」プロジェクトに参画するシステム試用実験）においてシステム機能を評価し、そこでの課題を受けて、①思い出の想起支援に特化して効果的な地図の検索機能の高度化、②思い出記述の中から、安全で快適な町作りに結びつく単語を抽出・整理して、町の復興計画につなげる手法の開発、③個人ごと、あるいは地域やグループごとに思い出を共有するためのレイヤの設計、④日常生活の中で、何気ないきっかけを判断して写真の撮影を促す仕組みの開発、を実施する。

集会所型共同想起支援については、分散型共同想起支援システムから入力される個人の思い出の内、公開可と入力が認められたものを選んで、大画面表示装置にキーワードとアイコンで表示し、タッチ操作で内容を閲覧できるようにすることによって、町の思い出の可視化を行うとともに、入力された思い出の数の少ない箇所に関して思い出の想起を促す。

II. 研究成果の概要

研究成果について、概要を記入してください。

分散型共同想起支援：2013年9月に岩手県宮古市において、7名の住民にシステムを使用してもらい、使用後にアンケートに4段階評価で回答してもらった。その結果、①町並みや震災に関係のある会話が前向きな気持ちを生む、②思い出の想起には、他人の思い出を読んでいるだけより、自分の思い出を書き込む主体的行動が重要、③災害に関する思い出よりも、昔住んでいた場所や通っていた学校など、災害とは関係のない思い出が多い、などの成果を得た。システム機能については、①中高齢者がスマートフォンに思い出をテキストで記入する作業は抵抗感が大きい、②地図は、ページや縮尺が変わると、現在位置の特定が困難なこと、③地図上で思い出の場所を探し当てることが予想以上に困難なこと、がわかった。これらに基づいて、(a) ラフスケッチを検索キーとして地図の該当箇所を検索する機能の概念設計、(b) 収集した思い出の内容を形態素解析し、抽出した名詞と形容詞から、「楽しかった」などの前向きな評価のある施設や場所を選び出すアルゴリズムの基本設計、(c) 日常生活での写真撮影状況についてアンケート調査を行い、平均的なスケジュールに基づいて写真撮影を促す方法の基本設計、を実施した。

集会所型共同想起支援：地域内で住民が自由に対面できる場（駅、小学校、公民館、集会所など）で気軽に共同想起を行えるようなタブレット型共同想起支援システムを開発した。登録時間の短縮、プライバシーや多数の思い出を表示することによる視認性の悪化などに配慮して、具体的かつ詳細な思い出をテキストで登録する形はあえて取らず、あらかじめ用意したスタンプを押したり、地図の関連場所に色を塗る（色は思い出の内容を反映）などの方法で、思い出の内容の概要を登録する方式とした。評価実験により、有効性を確認できた。